

永遠の友 植村猶行君の思い出

林 角 郎

入学から卒業まで

私達は昭和21年4月に現在の千葉大学園芸学部の前身である千葉農業専門学校に入学。同時に浩気寮に入り、その時の同室の同級生が植村猶行君と棚田幸雄君でした。植村君は陸士出身とのことで、年齢も2つほど上で、まだ軍隊調の硬い感じで話しておりました。この3人に、岩手県出身で学校の近くの徳川様のお屋敷に下宿した橋本昌幸君を加え、4人が親友となりました。

植村君は園芸は初めてのようでしたが、もともと花好きだったようで、3年生の時は花の専攻をし、卒業後も花一筋で通しました。

これに対して私は考えを変え、棚田君と共に農業経済を専攻し、橋本君は育種を専攻しました。卒業後棚田君はそのまま愛知県農業総合センターで農業経済の研究を続けましたが、他の3人は分野は違うものの花の部門で仕事をしました。

寮では9月に部屋の組替えがあり、2年生になって私は寮を出て橋本君と一緒に下宿しましたが、植村君は3年生になるまで寮に残り、学生の委員長になって寮の運営にあたったようです。

卒業後の就職その他

我々は昭和24年春に卒業し、植村君はすぐに誠文堂新光社に入社し、農耕と園芸の花の担当となりました。その後のことは宮田さんが詳しく述べられると思いますので省略します。

私は昭和26年に千葉県農業試験場安房分場に転勤となり、その後は試験研究に没頭して直接会う機会はありませんでした。

でもその頃植村君はNHKの趣味の園芸にも定期的に出演していましたので、テレビで時々みておりました。最初は下重暎子さんの司会などで話し役として出ていたと思いますが、その後しばらくしてから司会役をしているのを見て驚いた記憶があります。

テクノ・ホルティで共に教えて

その後、昭和63年4月から、私と植村君は第一園芸株の岩井さんに勤められ、埼玉県行田市に新しく開校した伊東学園のテクノ・ホルティ園芸専門学校に勤務しました。私は単身赴任で学校の寮に泊り、植村君は東大泉の自宅から2時間近くかけて通勤しました。学校は生産や流通、造園、パイオ等の実務者養成が目的のため、植村君は園芸文化史と実習を担当していました。

授業の際は例の通りの生真面目さで独特の字体の手書きでピッシリと書いた厚い資料を毎回作り、学生に配って話していました。しかし最初は声が小さく、学生からよく聞き取れないという不満がでました。このため大きな声で話すようになり、学校の校舎内に入ると2階の講義の音が1階までピンピン響いていたようすを昨日ように思い出します。

話もかなり熱を入れて話していたようですが、不熱心の一部の学生達はその内容より話し方のくせだけを問題にし、1回だけ行った学生のアンケートの際に、そのことが述べられていて、かなり怒ったことがありました。しかし熱心な学生達からは大変慕われており、いろいろと質問されて、それに丁寧に答えて対応しておりました。

花の友として

植村君自身としてはペゴニア類に非常に強い魅力を持っていたようで、ペゴニア協会を作り普及に努めていました。私は切花、鉢物、花壇苗等商業ベースの花を主に考えていたため、ペゴニアについては話を聞くだけの状態でしたが、まだやり残した仕事も多くあったものと思います。

平成16年10月に橋本昌幸君の容態が悪いということで植村君に電話し、二人で盛岡まで日帰りで見舞いに行ってきました。その際新幹線の往復の時間全部を話して過ごしましたが、その後はあまり会う機会もなく過ごしていたところ、突然の連絡でびっくりし、また落胆しました。今はただ謹んでご冥福をおいのりするのみです。